

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ <http://shakatsusushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsusushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

FAX(03)329915367

購読料 月額 (郵送 350円・メール 175円)

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

キユーバの大勝利

オバマ大統領は敗北宣言

滝野 忠……2

支離滅裂な安倍首相

原野人……3

―独占資本は「国民の命と平和な暮らし」を限りなく奪う―

◇資料1 文化芸術懇談会◇

沖縄のメディアは左翼勢力に乗っ取られている……………4

◇資料2 琉球新報・沖縄タイムス共同抗議声明◇

言論・表現の自由弾圧にはだんこ反対……………5

稲盛名誉会長、山口社長による言語道断の暴挙

稲村 守……6

―京セラ株主総会報告―

釣れた！登った！小林名人に弟子入り

蓑輪 泰臣……8

―弥次喜多道中第三弾 佐渡への釣行(二)―

読者からのおたより……………12

旬刊 社会通信

NO. 1196

二〇一五年七月一五日号

二〇一五年七月一五日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

キ ュ ー バ の 大 勝 利

オバマ大統領は敗北宣言

オバマ大統領がキューバとの国交回復、その証として大使館設置を、七月二日発表した。キューバ革命は一九五九年一月一日以来、キューバはアメリカとの平和共存を求め続けた。それを拒否し、JFK（ジョン・エフ・ケネディー）はキューバ圧殺をめざし、軍事侵攻、カストロ暗殺、内政混乱をめざす経済封鎖を実行した。カストロ暗殺計画は数百回にもおよび。

キューバは国家を守りぬいた、社会主義を守りぬいた。そして、七月二日、オバマに「キューバを孤立化させるわれわれの努力は逆効果だった」といわしめた。アメリカの敗北宣言であり、革命からじつに六十四年、キューバ大勝利である。

キューバはアメリカのフロリダからたった九十マイル（二四〇キロ）、東京・静岡の距離でしかない。日本でいえば、静岡にキューバせん滅の前線基地が置かれ、さきに述べた壊滅作戦をアメリカは行い続けた。キューバはカリブ海に浮かぶ小さな島国、土地はやせ、天然資源は乏しい。ヘミングウェイの『海と老人』は植民地（スペインのついでアメリカの）一有様（ありさま）を映し出す。アメリカの金持ちの遊び場、なんら価値を生産することなく、さまざまな収入―所得の散財を生業（なりわい）とするいまゆう観光地としてあった。

そんな国をカストロは社会主義国家に「革命」し、アメリカの侵略を許さなかった。その原点はなにか。「思想は武器に勝る」、「労働者は教育で政治思想を高め文化的となる」、「思想闘争こそ社会主義の根本」との確信でありその実践である。カストロのこの思想が六十年余の継続で、キューバ人民は経済的に貧しさを強いられるなか、資本主義文化でなく社会主義文化・人間をつくりだした。キューバ革命の成果、社会主義政権はいかにあらねばならないかの見本である。

ラテンアメリカ諸国が親米国家から、民主主義国家、反米国家になったことが、アメリカの政策転換の原因と多くは言う。これは木を見て森を見ぬザレ言だ。キューバの社会主義的文化が、ラテンアメリカの現情を生んだ。一九七〇年代、中南米は、ニカラグア、エルサルバドルそしてチリ等に革命の波があった。チリのアジェンデ人民戦線政府（一九七〇年九月―一九七三年九月）は先進資本主義国における社会主義へのモデルとされた。

向坂逸郎先生は、私に「チリに行け、勉強してこい」と命じた。旅券準備のさなか反革命が起きた。こんな時代、情勢であった。革命の波は引き、ラテンアメリカは一九八〇年代、軍事独裁が支配した。そして一九九〇年前後のソ連・東欧社会主義国家崩壊である。ソ連はなぜ崩れたか。資本主義文化の思想に屈した。なぜそうなったのか。科学的社会主義がそれら国ぐにでの出世の「官房学」となったゆえである。カス

トロはソ連崩壊の根本原因をきわめてやさしく率直にこう述べる。

「社会主義陣営とソ連は、基本的に自らの過ちによって破壊されたものではありません。うそ、欺脈、デマ情報などを操るマスメディアという恐るべき機構によって破壊されたのです。人々は、信じこまされていったのです。誰一人、消費主義社会の西側世界が、今日想像できる最も素晴らしい世界だという幻想に抗しきれなかったのです。」
(滝野 忠)

支離滅裂な安倍首相

―独占資本は「国民の命と平和な暮らし」を限りなく奪う―

Jパワー(電源開発)と大阪ガスと宇部興産の三社が共同出資(山口宇部パワー)で宇部市に計画している大型石炭火力発電所(六〇万kw級を二基)の建設について、環境省が待ったをかけた。二酸化炭素削減の観点から「現時点では新設は是認しがたい」とする環境影響評価(アセスメント)の意見書を経産省に提出した。

環境・経産両省の出来レースかとも思われるが、安倍晋三の地元県の企業に関わることだけに、意図は支離滅裂である。

安倍首相は、戦争立法によって、「国民の命と平和な暮らしを守るために」中東・ホルムズ海峡の機雷掃海にも参戦するとする。

「遠くで油が入りにくくなったとの話まで対象なら満州事変の時と同じだ」と阪田雅裕・元内閣法制局長官は国会で述べた。

実際には、天然ガス輸入はもとより、近年の石油輸入はホルムズ海峡経由がなくともさほど困らない。石油輸入が本当に心配なら、石炭にすればよい。オーストラリアやカナダなどからだから、ホルムズ海峡とは百%無縁だ。

Jパワーが開発してきた石炭ガス化複合発電(コンバインドサイクルガスタービン)と廃熱によるスチームタービンの組合せ)は大気汚染物質を大幅に減らすことができるし、発電効率を旧型火力の三割から五割に上げられるので、二酸化炭素の排出量も大幅に減らすことができる。天然ガス複合発電だと六割に上げることができる。

しかし上記の山口宇部パワーの計画を認めると、政府が電源構成比率の中で定めた三〇年度の石炭火力の設備と発電量を超えてしまうから認めるわけにはいかないという。そんな理屈なら、老朽化した火力発電所を廃止して新鋭火力を建設することになればよいし、そもそも原発をやめてその分を新鋭火力に向ければよいことである。

Jパワー関連でいえば、東北や北海道の「国民の命と平和な暮らしを守るために」は、大間に建設中のプルトニウム・ウランのMOX専焼炉を汚す前に中止して、新鋭火力に改造すべきである。

エネルギーの輸入依存が心配なら純国産の自然エネルギーこそ活用すべきである。『二一世紀のリニューアブルエネルギーネットワーク』(REN21、本部ドイツ)によると、昨年世界で新設された発電設備の約六割が自然エネルギーであり、総容量

は一三年比で約一七%の増加となった。なかでも中国の伸びが目覚ましい。

風力発電は昨年世界で五千百万kw建設された。デンマーク、スペイン、ポルトガル、ニカラグアなどでは、昨年国内の電力需要の二〇%以上を風力でまかとなった。

日本は電力資本の目先の利潤のために、買取り義務制度が崩され、自然エネルギー発電が低いままに抑えられている。風力や地熱等のポテンシャルはこれらの諸国よりはるかに高い。送電網等を完備して、北海道から九州まで自由に融通できるようにし、揚水式発電を風力などに活用すれば、自然エネルギーを大幅に伸ばすことができる。

原発をゼロとすれば、当面は火力が支柱だとしても、自然エネルギーによって火力は急速に減らすことができる。

百田尚樹氏と肝胆相照らす安倍晋三の頭は、そんなことはみな跳ね返してしまう。

五年前のあの時から列島全体で地震と噴火が活発化しているのに、原発を再稼働させようという。いずこも多くの人々については、速やかな避難計画など立てようもない場所である。高齢者や病人などははなから見捨てられるほかはない。累増する使用済み核燃料や各種放射性廃棄物は安全な処分の方法もない。

福島で炉底をメルトスルーした核燃料の一部は、格納容器の底を抜けている恐れさえあるが、状況はいまだ不明のまま。急増する汚染水は処理装置すら機能せず、溢れ出たり、放出されようとしている。福島の避難者には補償を打ち切って、「放射線管理区域」並みの地に帰還させようとしている。他方で、安倍首相は中東諸国にまで原発や兵器を売り込んでいる。

祖父らが開戦し降伏を遅らせて二〇万人の命を奪った沖縄には、その二七〇年間も、土地も安全空間も奪ったまま、耐え難い犠牲を押し付けてきたが、この上さらに新たな基地を造って犠牲を強いるという。

労働基準法を改悪して、「本人の合意があれば」残業ばかりか、休日、深夜の割増賃金も支払われなくなる。労働者派遣法の改悪によって、派遣労働（半失業）から抜け出せない人が増える。剰余労働を限りなく増やし搾取率を上げて、健康と命と暮らしを奪う。

国民のうち圧倒的多数は労働者とその家族である。独占的な大資本家階級（独占資本の経営者と大口所有者）とその政治的代理人は国民の〇・一%にも満たない。

戦争立法も各種立法も、安倍政権のすべての政策は、独占資本の目先の最大限利潤のために「国民の命と平和な暮らしを」奪うためのものである。（原野人）

◇資料1 文化芸術懇談会◇

沖縄のメディアは左翼勢力に乗っ取られている

改憲を目指す自民党若手議員の勉強会「文化芸術懇談会」が二十五日に党本部で開いた初会合での報道機関に関する発言の要旨は以下の通り。主宰する木原稔衆院議員、講師の作家百田尚樹氏の冒頭発言はメディアに公開された。その後、百田氏の講演、

出席議員による質疑が非公開で行われたが、発言者がマイクを使ったため、発言の多くは室外まで聞こえていた。

自民勉強会 議員らの発言要旨

百田氏 マスコミの皆さんに言いたい。公正な報道は当たり前だが、日本の国をいかに良くするかという気持ちを持つてほしい。反日とか売国とか、日本を陥れるとしか思えない記事が多い。日本が立派な国になるかということを考えて記事を書いてほしい。

(ここから講演) 政治家は国民に対するアピールが下手だ。難しい法解釈は通じない。気持ちにいか訴えるかが大事だ。集団的自衛権は一般国民には分からない。自国の兵力では立ち向かえないから、集団的自衛権は必要だ。侵略戦争はしないということまで改憲すべきだ。攻められた場合は絶対を守るということを書けばいい。

議員 A マスコミを懲らしめるには、広告料収入をなくせばいい。われわれ政治家、まして安倍首相は言えないことだ。文化人、あるいは民間の方々がマスコミに広告料を払うなんてとんでもないと経団連に働きかけてほしい。

議員 B 広告料収入とテレビの提供スポンサーにならないということがマスコミには一番こたえるだろう。

百田氏 本当に難しい。広告を止めると一般企業も困るところがある。僕は新聞の影響は本当はすごくないと思っている。それよりもテレビ。広告料ではなく、地上波の既得権をなくしてもらいたい。自由競争なしに五十年も六十年も続いている。自由競争にすれば、テレビ局の状況はかなり変わる。ここを総務省にしっかりやってほしい。

議員 C 沖縄の特殊なメディア構造をつくってしまったのは、戦後保守の墮落だった。沖縄タイムス、琉球新報の牙城の中で、沖縄世論を正しい方向に持っていくために、どのようなことをするか。左翼勢力に乗っ取られている現状において、何とか知恵をいただきたい。

百田氏 沖縄の二つの新聞はつぶさないといけない。沖縄県人がどう目を覚ますか。あつてはいけないことだが、沖縄のどこかの島が中国に取られれば、目を覚ますはずだが、どうしようもない。(沖縄の基地負担問題は)根が深い。苦勞も理解できる。

(「東京新聞」六月二六日)

◇資料2 百田氏をめぐる琉球新報・沖縄タイムス共同抗議声明◇ 言論・表現の自由弾圧にはだんこ反対

百田尚樹氏の「沖縄の二つの新聞はつぶさないといけない」という発言は、政権の意に沿わない報道は許さないという「言論弾圧」の発想そのものであり、民主主義の根幹である表現の自由、報道の自由を否定する暴論にほかならない。

百田氏の発言は自由だが、政権与党である自民党の国会議員が党本部で開いた会合の席上であり、むしろ出席した議員側が沖縄の地元紙への批判を展開し、百田氏の発

言を引き出している。その経緯も含め、看過できるものではない。

さらに「(米軍普天間飛行場は)もともと田んぼの中にあつた。基地の周りに行けば商売になるということ人で人が住みだした」とも述べた。戦前の宜野湾村役場は現在の滑走路近くにあり、琉球王国以来、地域の中心地だった。沖縄の基地問題をめぐる最たる誤解が自民党内で振りまかれたことは重大だ。その訂正も求めたい。

戦後、沖縄の新聞は戦争に加担した新聞人の反省から出発した。戦争につながるような報道は二度としないという考えが、報道姿勢のベースにある。

政府に批判的な報道は、権力監視の役割を担うメディアにとつて当然であり、批判的な報道ができる社会こそが健全だと考える。にもかかわらず、批判的だからつぶすべきだ—という短絡的な発想は極めて危険であり、沖縄の二つの新聞に限らず、いづれ全国のマスコミに向けられる恐れのある危険きわまりないものだと思う。沖縄タイムス・琉球新報は、今後も言論の自由、表現の自由を弾圧するかのような動きには断固として反対する。(琉球新報編集局長 潮平芳和、沖縄タイムス編集局長 武富和彦)

稲盛名誉会長、山口社長による言語道断の暴挙

—京セラ株主総会報告—

京セラ JALの大株主

二〇一五年六月二四日、京都市伏見区の京セラ本社ビル最上階・二〇階のホールにて京セラ株主総会が開かれ、昨年に引き続き出席した。

午前一〇時に総会は開会され、会社の事業報告が山口悟郎社長よりなされ、質疑に入った。社長は、「発言は一人二分以内で質問は二点まで、個人の誹謗中傷はしてならない」という条件をつけた。私は株主席・縦一六列の二列目、横には中ほどに座り(横は二〇人の席、三二〇席・満席)、議長である山口社長のほぼまん前で「議長!」と最初から挙手したが、全く当たらない。

だいぶたつてから当てられたJAL不当解雇撤回CA(キャビン・アテンダント)原告団の副団長でもある鈴木圭子さんが発言し、「京セラは日本航空の株の二・一%を保有している大株主であることから、日本航空の経営が悪くなれば影響は甚大であると考えます。日本航空では二〇一〇年に整理解雇が行われました」と発言したところ、「当社の事業と関係のない発言はやめてください。後ほど時間をとりますので、そこでやってください」と社長に言われたので、鈴木さんは発言をやむなく中断して、とりあえず席に戻った。

羽交い絞め 野次と怒号

そのあと、発言も出尽くしてなお挙手している私によく当てられた。

私は、印刷物としても配布されている『第六一期報告書』の二二ページ記載の「京セラフィロソフィ教育」に関連しての質問として、「昨年この京セラ株主総会での稲盛和夫名誉会長の私の発言の答弁への質問を致します。私の昨年の発言に対し、社

長は稲盛名誉会長より先に、『JALの解雇は、管財人が決めたことだ』と言われましたが、その後には稲盛名誉会長は」と、三行の原稿を読み上げるまで、「当社の事業展開と関係ない発言はやめてください。」と社長は発言席で二度も野次をとばす。

私が「報告書に記載されていることに関連してであり、去年のこの場の社長・稲盛和夫名誉会長の発言のことである。この会社の事業と関連あるかどうかはあなたではなく、株主が決めることではないか」とやむを得ず反論したところで、「もう長いからやめなさい。退場してもらいます」と。

いつも社前宣伝で出てくる男が飛んできて、かなり酒臭い息をしながら京セラ若手男性社員五、六人を指揮して、私をたちまち羽交い絞めして会場の外に追い出してしまった。会場内では百人くらいの満遍なく座った信者集団と思しきメンバーが、私に対して野次と怒号の大合唱を行った。

二、三年前の株主総会ならいざ知らず、今日の大会社の株主総会でこのような暴挙は許されるのだろうか。そして私が会場外廊下の折りたたみ椅子に座るかどうかと、いうものの数分で、事業報告の承認、事業計画の三点の提案と質疑と承認を終え、株主総会は終了してしまった。

時間制限 退場の脅し

その後、会社役員紹介があり、「会社事業の説明会」が同場所で行き続き行われ、「パープルサンガはどうかならんのか（ぜんぜん勝てない）。稲盛名誉会長は一生懸命だけど、外の役員は何もしてへんのと違うか」とか、「京セラはラグビーのチームをつくってはどうか」など、「会社の事業展開と直接関係ない」発言や会社役員への誹謗中傷（？）なども多彩にあったあとで、ようやく鈴木圭子さんが指名され、先ほどの発言の冒頭から繰り返したら、「当社の事業展開と関係ない発言はやめてください。」と社長は何度も怒鳴る。「JALの大株主と言うことで関係あるんですが」と言っても、「これ以上発言続けると退場願います」と。やむを得ず、発言を二言三言でまとめざるを得なかった鈴木さん。

すでに株主総会が終了しているのに発言内容に介入して、時間制限して、退場の脅しをかけてくる山口社長。発言前には出席番号と名前まで、株主総会同様に言わせるというやり方だ。同じ株主の他の発言は時間無制限で発言し放題状態。すでに正午を回っている。

おかしいですね

最後の頃に、女性が発言し、「私はきょう初めてこの株主総会に出席しました。京セラと言えば稲盛和夫さん。このごろ飛行機の事故があいついでいます。私の周りでも飛行機を利用してはいる方はたくさんいらっしゃいます。お金儲けということで、安全がないがしろにされたらたいへんです。日本航空で大きな事故とかあったら、京セラにもすごい影響が出ます。」とせつせつと訴えられたのは、核心をついた説得力のあるものであった（こういうのも、私は追い出されたホールの外の廊下のテレビを

見て、脇の女性二人の私語に我慢を重ねながら耳をそばだてて懸命に聞いている。

ところが、この女性の発言に対しても、次に「今年は御巢鷹山の事故から三〇年で」となったとたんに、社長は「もう辞めてください」と。その女性は「外でビラも配られていましたけど、争議解決して安全な飛行を日本航空ができることが、京セラのためにもなると思います」と結んだ。

鈴木さんには終わってから株主の女性が寄ってきて、「どうしてあんな最後まで発言させないのでしょか。おかしいですね」と言われたとの事。信者集団の大合唱でその場では公言できなかったが、おかしいと思つた株主も多数いたようだ。

京セラ流

去年と比べて、ちょうど百人ほどあふれていたのも計算があう。廊下に数十人、別室に六〇七〇人ほどだろうか、一般株主が信者集団に追い出されてしまった感じだ。社長はJAL不当解雇問題に詳しい答弁せず無視抹殺し、「稲盛塾長」と言つて発言した年配男性が「他の独立した会社法人のやり方にこの場で触れたら問題になる」という発言で稲村・鈴木発言などへの批判を行つた（またこれが長い発言で一〇分ほどやっていたが、それは許されるのである）。

いちばん傑作だったのは、私が羽交い絞めの暴力で退場させられる際、役員席一番後ろ窓際にいた稲盛名誉会長に「稲盛さん、これがあなたの民主主義か」と言つて壇上のしつらえを良く見たら、去年と同じ席に稲盛名誉会長はいたが、去年のようにさつと山口社長の脇の発言席に出て来れないようにしてあつたのである。そこまでの通路がやたら狭く、稲盛が発言しようと思つても物理的に出てこれないのである。山口社長以下の会社役員・スタッフが発言を本当に阻止したいと苦心惨憺したのは、私に對してではなく、まさか羽交い絞めするわけにいかない人間に對してではなかつたのだろうか。

いづれにしても、株主の当然の権利を不当に踏みにじり、最低の資本主義的民主主義、ブルジョア民主主義の体裁さえもなりふり構わず捨て去つて、封建領主よろしく問答無用で押し切るのが京セラ流である。そういうと、今太閤のこの会社の創業者・トップの自宅は、伏見桃山城のほど近くにあり、この京セラ本社の二〇階の東側からはるか眺めるお城との一直線上に、稲盛和夫宅がある。そのことを明確に意識して彼は二〇年ほど前、現在の本社屋の場所を定めたのであろう。

(JAL闘争京都共闘・事務局次長・稲村守)

釣れた！ 登つた！ 名人に弟子入り

― 弥次喜多道中第三弾 佐渡への釣行 (二) ―

大物 一息ついて、車を上流に走らせます。車窓からは、どこを走っても田植中の光景と紫色の花を輝かせている「怖いふじの花」の連続です。山道を上つて目的地に到着、名人が早々溪流のポイント探索へ、何も知らない小生はただただ「大きい魚を

釣る」との強い気持ちで後をついていく。そこに見えた光景は「絶景」です。上流でせき止められたダムから流れてくる大量の水が滝となり流れ落ち、滝底には青々とした水溜り、そこから再度流れて次の水溜りを作り川は力強く流れています。「絶対にいる」と確信した小生、釣り道具を取りに帰る小林名人の後ろ姿を見ながら、「誰もいない。今がチャンス」とはやる気持ちを抑えながら、早々に準備をして最初の一投、釣り糸を垂らす。

少し時間を置いて竿を上げた瞬間です。「重い」と感じるくらいの大物が掛かっています。「釣れたついに大物を釣った」と釣りの準備をしている滝野さん達に誇らしげに見せつけるも全く無視。それよりも「大丈夫か」との目線です。そうです。小生の立ち位置が川の真ん中です。糸をコントロールできない魚が振り子のように左右に揺れ動いています。「どうしようどうしよう」と不安な気持ちにも誰も助けてくれません。滑ったら川底に落ちてしまいます。足元に全集中して少しずつ移動してやっと歩道に魚を投げて一安心です。一匹釣るのに四苦八苦している小生を尻目に小林名人が素早く釣り上げ素早く針をとり素早く「ウエストクルール」の中へ魚を導く。この素早い動作に「名人」を感じる瞬間です。

ぜいたく 釣り三味の中でひとときの安らぎを感じるのが昼食です。名人が、川原で何やら料理しています。平場では岡固さんが持参したアウト用のコンロにガスカートリッジ、コッペル（持ち運び便利な鍋）に天ぷら油を注ぐ。山うどの天ぷらです。

なんと先ほど釣れたヤマメを名人がさばいて刺身に、背骨は当然天ぷら。新緑の真只中に身を置いて、溪流の音色に「釣り人」を感じ食べる天ぷらと刺身、なんと贅沢な瞬間でしょうか。都会の殺伐とした人間関係の社会、身も心もズタズタにされる職場から脱出して佐渡へ、わずかな時間でもホットすることができたことに感謝です。

悔しさ 身も心もリフレッシュして、次の川へと移動です。雪山から流れてくる冷たい川に入り早々糸を垂らします。ウエーダーを着けていても冷たさが伝わって来ます。「まずい」と思った時には遅すぎました。針が岩底に引っかかりました。寒水の中に深く入り、足でかき回すが名人と違いがあるのか、いくら回しても針は外れません。仕方なく腕を伸ばして糸伝いに取るしかありません。どうにか針は取れましたが、腕まで浸かった体は冷たさで震えます。

早々退却、田んぼのあぜ道を下流に歩きながらポイントを見つけ糸を垂らしますがなかなか釣れません。諦めて待ち合わせ場所に行くと、三〇センチを越える大きなイワナを釣り上げて満足感たっぷりの笑顔で迎えた岡固さんがいました。釣った場所を聞いて愕然です。冷たい川に腕まで濡らしたあの場所で釣り上げたとのこと、悔しさがこみ上げてきます。「悔しさは成長の種」と勝手に自己満足してこの日の釣りは終わりです。

今日の夕食は買出しです。途中電話で魚屋さんに地元で捕れた魚の刺身と焼き魚を注文して持ち帰ります。刺身はしょせん刺身、どこでも同じだろうと思って食べた

ころ「うまい」と自然に言葉が出るくらい美味しい刺身、焼き魚もスーパーで買って食べるものとは旨みが全然違います。飲むお酒も進みます。話は当然釣り三昧です。

アタリ、合わせ 「イワナは小学生でも釣れる。蓑輪君は釣ったのではなく釣れた」との厳しい言葉が飛び交う。一日を振り返り名人からの指摘を考える。釣れた時にはいつも針が喉奥まで飲み込まれている。名人の釣った魚は口元に軽く引っかかっているだけ。何が違うのか。「アタリ」の感触と「合わせ」のタイミングとの話に、「アタリ」がどのような感触で、「合わせ」をどうするのか全く体で覚えられない。「合わせ」は竿を大きく持ち上げるのでなくスナップをきかせ軽く竿を上げる感じ」との言葉に改めて釣りの難しさを痛感させられました。

厳しい指摘を聞いていた滝野さん「弟子として認められたね。一番弟子の俺は不肖の弟子だから、いい弟子ができた」と、褒めているのか、貶しているのか、それともこれで卒業できると思っているのか。

楽しい語らいは深夜となり、自然とお腹もすきはじめてので「カップラーメン」をたべる。なんと美味しく感じたことでしょうか。

朝一番の目覚めは小林名人、二番手は小生、それから二時間後に滝野さんの起床です。年を取ると目覚めが自然と早くなるのに滝野さんにはこの自然の法則が当てはまらないようです。

手抜き 定刻に岡固さんのお迎えです。最後の一日、大物が釣れることを願いながら出発です。ところがどうでしょう。着いたところは、溪流というよりも桃太郎の物語に出てきそうな清流です。岡固さんによると、以前大きいニジマス釣った場所とのことで期待が持てそうです。早々滝野さん、大物のニジマスを釣った場所に糸を垂らします。下流に岡固さん、上流に師匠と小生が分かれ、最初のポイントに師匠が糸を垂らします。

小生の感が冴えました。師匠を追い越して少し流れの速いポイントに糸を垂らすとその瞬間です。大きいイワナが掛かっています。引き寄せることができない小生は、ただただ砂場に投げるのが精一杯です。つかんでみると針が喉の奥までとどいています。名人もそばにいません。仕方なく糸を力強く引くと「プツン」糸が切れてしまいました。さてどうしたものか、新しい針糸を結びつけるのが「釣り人」ですが、少し長めの釣り糸のついた予備糸をそのまま竿につけることとしました。この行為が師匠から雷が落ちる原因になるとはその時には分かりませんでした。

追い越しては追い越されとデットヒートを繰り返しポイントに糸を垂らす師匠と小生、その時です「その糸はどうしたの、この狭い川でその糸はダメだ」とのお叱り、「手抜きを見破られた」と思いながら、短い糸に取り替えます。その糸は先ほど魚の喉に針が掛かり切れたもの、一からの準備です。まず針を付け、オモリを付ける。このオモリが手から離れて川の中に、一つ二つと落ちてしまう。なかなか釣り糸になりません。時間はどんどん過ぎて行きます。「焦るな」と自分に言い聞かせながら「忍

耐」の心境です。どうにか出来上がりです。見た目は最悪の釣り糸ですがかまってられません。早々に釣り糸を垂らします。不思議ですね。釣れました。師匠から「よくそんな糸で釣れたな」とお褒めの言葉なのか諦めの心境なのか、笑われてしまいました。

そろそろお昼時、営業中止の郵便局と公民館、廃校になった小学校を目の前にしての昼食です。食事中の我々を物珍しそうに覗みつけながら女子児童達のはしゃぎ回っています。子供たちの目はいつでも輝きを放っています。和めるひとときを過ごして最後の溪流釣りへと移動です。

恐怖 車を道路脇に駐車して釣りの準備に取り掛かろうとした時です。滝野さんが「私の釣竿がない」との驚きの言葉、まさか昼飯を食べたところに忘れたのでは、引き返す時間のロスを覚悟しながら、身の回りを探していると、なんとびっくり玉手箱、見つかりました。それも驚きの場所です。車のボンネットの上からです。

弥次喜多道中ここにありですね。よく落ないでしがみついていたものと爆笑、笑いの渦に巻き込まれていました。

気を引き締めて険しい土手を降りたその場所は、今までにない険しい岩肌と流れの速い滝、青々とした淵です。まずは一投、その瞬間ググイ「きました」大きいイワナです。初めて針を飲み込まれずにゲットです。少しは上達したのかと自己満足、自信過剰に、その後の行動が釣り人たち三人の罵声を浴びることになるとは。

まずは小林名人からの一言、「名人が釣り糸を垂らしたところにど素人が糸を垂らす行為は失礼だ」との厳しい言葉です。岩肌の一角に大きい穴があり、名人が糸を垂らした後に小生もと思ひ糸を垂らした行為に対しての「洗礼」でした。

滝野さん、岡固さんからの厳しい言葉もいただきました。厳しい岩肌を易易と登り頂上から小林師匠、弟子に「来いよ」との合図です。師匠の言葉は絶対です。恐怖を感じながらも「意を決して」岩肌にしがみつながら登り始めたその時、滝の下にいた滝野さん、岡固さんが顔色を変えて大きな声で何やら叫んでいます。しかし、その声は滝のうたれる音にかき消されて聞こえません。「登る方向を変えろ」と言っているようです。「落ちたら少々の怪我ではすまないかも」と恐怖が襲ってきます。「溪流釣りに来たのだから勝負するしかない」と覚悟を決め、ヌルヌルする岩肌を「川を上る魚」川道に沿って慎重に登りきりました。

二人から「ど素人には危険だから帰ってこい」との叫び声だったと帰りの車の中で言われてしまいました。

責任の一端を負うはずの師匠は我関せずの心境で聞き流していました。釣りも全て終わり、上流からの帰りは道端に生えている「ワラビ」を採り持ち帰りです。三泊の「溪流釣り」あつという間に時間が過ぎてしまいました。

最後に、小林名人、師匠の「笑えない」出来事を紹介して「弥次喜多道中第三弾」を締めたいと思います。

行水 青々とした淵で釣り糸を垂らしていた小生の釣竿にイワナが掛かり釣り上げよ

うとしても振り子のように釣り糸が定まりません。師匠小林さん、弟子の釣った魚を取り込もうと必死に魚に手を伸ばします。しかし、思うように竿をコントロールできない小生の魚は、小林名人の顔をめがけていきます。

避けきれない師匠はバランスを保ちきれずに体ごと淵の深みにドボンと全身浸かってしまいました。立ち上がろうとした師匠でしたが再度バランスを崩し水の中へ沈んでいきます。申し訳ない思いの弟子は、魚のついた竿をほおり投げ、師匠のそばに駆け寄り、手を差し延べるのが精一杯でした。

さすが名人です、全身ずぶ濡れの体を気にせずに、弟子の釣った魚を丁寧に取り込んでくれました。小林名人、師匠「ご指導ありがとうございます」。(蓑輪 泰臣)

◇ 読者からのおたより ◇

残金カンパ お世話になっていきます。恥ずかしい金額ですが、残金カンパです。

(神奈川・S)

編集部より いつもお心遣いいただき感謝です。ありがたくいただきました。

(北海道・I)

責任 暴走化する安倍自民党政権！選挙民にも責任の一端があるように思う。

編集部より そんな考えもなくありません。だけど責任をとらせるのも選挙民の責任。

とばされ九十年 A局にとばされ、七月で九十年になります。「十年ルール」で年度内に飛ばされるかも知れません。

(北海道・S)

編集部より J P 労組運動方針目にしました。すべては三会社の上場にむけてますね。連合内では生産性向上のかけ声が高まっている。「十年ルール」どういうもの？

若者の活躍に元氣 たいへんな事態がどんどん進んでいきます。もともと多くの人が声をあげなければいけないでしょうね。いつも金太郎あめ状況ですが、がんばりたいと思います。学生・若い人の活躍が伝えられるようになり、元氣がでますね。

(兵庫・I)

編集部より 連日の活動に敬意です。津に帰ることありますか。八月二日は津市内でクラス会。

当選 村議選(北海道占冠村)では三名の仲間が当選することができました。(村議・五十嵐正雄)

編集部より 連日の活動に敬意です。当選おめでとう。PC不調はたいへん。ゆっくり待ちます。

(富山・J)

絶対反対 「戦争のできる国づくり法案」「奴隷労働時代へもどす法案」は絶対反対です。労働運動が有効な闘いを構築できず、労働組合組織率が減少している状況で、改めてユニオン運動の重要性が増しています。これからも有効な情報を。

(網走・鈴木孝)

編集部より 同感です。編集者泣かせの情勢です。どんな情報お望みですか。

夢でない 安保関連法案廃案も夢でない。

(和歌山・K)

編集部より 自民党内に権力闘争が、その現れが百田や自民議員の発言です。情勢大きく変化しはじめましたもの。

進路 唯一の正しい情報誌・進路として無くてはならない存在です。今後もよろしく。(京都・M)

編集部より 嬉しいお便りありがとうございます。もつとよくするためにどうするか、お知恵を。

戦争反対 茨城総行動 六月十七日、「戦争法の成立をとめよう！ いばらき総がかり行動」で、水戸駅北口でリレートーク、大工町までデモを行いました。県内で初の超党派による平和・護憲の六団体構成の実行委員会の主催によるもので、県内各地から約一千人の若者・市民・労働者が参加しました。憲法を活かす会・茨城の矢田部理元参院議員はリレートークで、安倍首相が砂川裁判の判決を集団的自衛権を合理化するための根拠としていることに関し、同裁判は自分が最初に取り組んだ裁判であり、判決では集団的自衛権など一言も触れていないと強く批判。杉森議員も新社会党を代表して挨拶し、安倍首相が戦争法の合理化のために「国を守る」と述べていることに触れ、中東石油の確保のために戦争参加することの無意味さを指摘し、火山活動の活発な鹿児島・川内原発を再稼働させることは、国を破壊させるものだとして強く反対しました。七月十八日(土)午後四時～五時半、牛久市駅東口駅前広場で、リレートーク&デモ行進をとり組みます。(牛久市議 杉森弘之)